

日中浄土教思想史の研究 (博士論文要旨)

藤 堂 恭 俊

本研究の意図するところは、従来の浄土宗学の枠をこえて、思想史的な観点にたちながら、中国浄土教、とくに隋・唐以前における曇鸞の浄土教思想を中心として、道綽・善導にいたる展開の諸相に関する解明と、日本浄土教、とくに法然の浄土教を中心として、源信・永観の浄土教思想との比較、および善導浄土教思想の受容と展開とを究明することによって、法然浄土教の独自性を日中浄土教思想史の上に開顕せんとするにある。本研究の目次は左記のとおりである。

序 論

第一篇 中国浄土教思想史の研究

第一章 中国仏教における危機観

——とくに隋唐以前における諸問題——

第二章 鳩摩羅什訳出禅経典における念仏観

第三章 曇鸞教学における実践論とその展開

第一節 石壁寺曇鸞大師の浄土観成立の意義とその特徴

日中浄土教思想史の研究 (博士論文要旨)

第二節 曇鸞の奢摩他・毘婆舍那觀

第三節 北魏仏教における称名とその社会背景

第四節 浄土教における觀・称の問題

第五節 中国浄土教における因果に関する諸問題

第六節 善導大師編著になる『往生礼讃』所説の五念門攷

第四章 中国浄土教と疑經典

第一節 中国浄土教における随逐擁護説の成立過程について

第二節 善導教学における疑經典

第五章 『觀無量寿經』の説相と阿弥陀仏立像

第一節 俊乘房重源と乘雲の阿弥陀如来三尊像

第二節 乘雲の阿弥陀如来像について

第二篇 日本浄土教思想史の研究

第一章 禅林寺永觀律師の浄土教思想

第二章 浄土開創期前後における法然の課題

第三章 法然の浄土教判論

第一節 法然上人の教判の基本的性格とそれを成りたせるもの

第二節 浄土宗教判論

第四章 法然における実践論の諸問題

第一節 法然とその遺文にみられる三昧について

第二節 法然における称名念仏と諸行

第三節 五種正行論

第四節 異類助成攷

第五節 法然の至誠心積について

第六節 法然の遺文にみられる他力の用語例とその解明

結論

各章節の概要は左記のとおりである。

第一篇は五章十節からなっている。そのなか第一章は、曇鸞の浄土教思想をなりたたしめる信仰基盤である無仏（釈迦・弥勒二尊の間）観の先驅を究明する意図を持つものであり、その先驅を西晋末の道安の上に見出すとともに、末法思想成立にいたるまでの期間に中国仏教徒による仏教史観と、その展開を疑經典の上に見出さんとするものである。第二章は曇鸞浄土教思想の上に示される下品の臨終十念にみられる除罪法の先驅を究明する意図を持つものであり、その先驅を五門禪の随一である念仏観の上に見出さんとするものであり、また曇鸞の奢摩他釈に示される不浄観等の諸観に関係をもつものでもある。

第三章は六節からなっている。第一節は北魏前期の仏教にたいして指導的役割をもった鳩摩羅什と、その高弟僧肇などの般若思想に根ざした浄土観を究明するとともに、その影響をうけ、なおかつ展開を示した曇鸞の浄土観の特徴を解明せんとするものである。第二節は曇鸞が示した止観の種々相を、重禪輕講の傾向をもつ南北朝時代の華北仏教界において行われた止観に密着させることによって歴史的把握を試み、曇鸞の称名念仏の実践的特異性を解

明せんとするものである。第三節は曇鸞が自行化他した往生行の実態を念称並用・但称名の二態に見出し、但称名にかたむかなければならない理由の究明、曇鸞の名号観、さらに北魏時代においていかなる意樂を称名に期待したかという問いを中心として、称名信仰の社会背景を説明せんとするものである。第四節は廬山慧遠の浄土教における禪観と浄土教との本質的な結びつきを究明し、さらに曇鸞の五念門釈における彼独自の解釈と、それに表裏する称名の登場を指摘し、その重要性の開頭をこころみたものである。このことは善導による五種正行創設に先駆的役割を持つ点において、重要な歴史的意義を持つものと言わなければならない。第五節は中国に固有な礼教社会に育まれた因果応報観の上に、仏教の説く三世を貫く因果応報・輪廻転生の思想がいかに受容され、しかもそれを浄土教の思想・信仰の上いかに結びつけられたかについて、廬山慧遠、曇鸞、道綽、善導の浄土教思想を検討せんとするもので、悪業の牽引と清浄業としての十念の軽重等の数点を考察したものである。第六節は善導によって五種正行が創設される一過程を究明せんとするものであり、世親の説く五念門の変貌にかかわる内容である。

第四章は二節よりなっている。そのなか第一節は疑經典である『十往生阿弥陀仏国経』に説く二十五菩薩隨逐擁護説の成立過程を究明せんとするものであり、第二節は善導が『十往生経』をいかに受容し、浄土教思想の上に展開せしめたかを究明せんとするものであり、これら二節はともに、インドの浄土教思想が中国に受容され定着する過程における中国的変貌に関する説明でもある。第五章は『観無量寿経』第七華座観に説く、弥陀三尊「空中住立」説の具象化に関する研究で、中国宋代の戒深による阿弥陀如来三尊立像の造像、日本における俊乘房重源によって造立された播磨浄土寺のそれ等について考察し、立像の意義を論じたものである。

第二篇は四章八節からなっている。第一章は法然にさきだつて善導の浄土教思想を受容した一人として永観をとりあげ、永観と法然とにおける善導の浄土教思想の受容を比較し、永観独自の受容とそのよつてきたる所以を説明

するとともに、その浄土教思想の特異性をあきらかにせんとするものである。第二章は浄土開宗以前と以後とに区別できる。前者においては主として法然は源信の『往生要集』からなにを学びとったか、それにも拘らず法然はなぜ源信からはなれて、善導に傾倒するに至ったかについて説明をかさね、後者においては大原問答に至るまでの期間において法然が持った課題を究明しようとするものである。

第三章は法然の教判の底流にあって二門判をなりたせたものはなにであるかを詮索し、さらに二門判を頓漸二教判とのかかわりにおいて説明せんとするものである。ついで法然の浄土教判の特徴を、それにさきだつ竜樹の行体としての難易判、曇鸞の行縁としての難易二道判、自他二力説とのかかわりにおいて論究せんとするものである。

第四章は六節からなっている。第一節は法然による口称三昧の否定と肯定を、彼自身の宗教経験と教学体系の双方に見出し、その否定と肯定のよってきたる所以を説明しながら、乱想の凡夫がいかにして口称三昧を不求自得し得るのか、また三昧を肯定しながらも、なぜそれを表面にうちださなかったのか、と言う問いを説明せんとするものである。第二節は雑行がいかに称名念仏の実践体系のなかに、ところを得しめられるかを説明せんとするもので、浄土往生の実践体系の上に雑行がいかに取扱われているか、三学の枠外において見出された出離生死の道としての称名の上に、戒定慧の三学がどのように具現するか、さらに法然における菩提心の否定をめぐる問題について考察をかさねたものである。第三節は「念仏のひとりだち」に関する内容で、善導の五種正行説を法然がいかに受容し、展開せしめるに至ったかについての説明である。なお五種正行楷梯論という試論を提起しておいた。第四節は直接的に第三節にかかわる論で、助成の概念を明確にし、「同類の助成と異類の助成との同異を区別し、異類の助成が浄土門の実践体系の上ではたす役割と、異類の善をして念仏の能成たらしめるものはなにであるか等について説明せんとするものである。第五節

は善導独自の至誠心積の受容と展開に関する説明であり、とくに金沢文庫本・高田専修寺本・和語灯録所収本相互の内容的相異をふまえながら詳論した。第六節は法然の遺文にみられる「他力」の用語例を分析し、教判に属するもの、阿弥陀仏の本願力を指すもの、受動的な実践態度を指すもの、一念義を指すもの、という四類型に整理し、その内容の説明をこころみたものである。

結論においては浄土教の中国における受容と展開における中国的変貌を論じ、ついで日本浄土教における法然の選択の論理を論じてその特徴を指摘し、さらに日中浄土教思想史を一貫するものは、阿弥陀仏の本願の開頭、つまり浄土教の究竟大乘性の開頭にあったことを論述している。